

博士学位請求論文 審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号

氏 名 豊田 泰淳 君

論文題目 プロティノスにおける可感的世界の探求とその意義

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授
文学研究科委員

上枝 美典

副査 慶應義塾大学文学部教授
文学研究科委員

荒畑 靖宏

副査 大阪府立大学名誉教授

山口 義久

副査 岡山県立大学特命研究員

樋笠 勝士

論文概要

本論文は、紀元後3世紀の哲学者プロティノスによる可感的世界の探求を主題とする。プラトンのイデアを根本原理とするプラトン主義者たちにとって、可感的世界における事象の探求はあくまで第二義的な位置づけを持つものと見なされることが多いが、とりわけ一者(*tò ên*)という超越原理を導入し、そこを起点として下位の世界の産出プロセスを説明するプロティノスにおいては、そうした傾向が顕著であると考えられてきた。実際、前世紀半ばまでのプロティノス研究においても、研究者達の関心は専ら一者、知性(*νοῦς*)、魂(*ψυχή*)といったプロティノス独自の高位原理に向けられており、そうした諸原理と可感的世界、あるいは可感的世界そのものの構造が主題となることは殆どなかった。しかしながら、彼のテキストを精査し、彼が残した可感的世界に関わる議論を吟味すれば、以上のような評価が正確ではないことが即座に明らかとなる。むしろ、彼は同時代の人々と可感的世界のあり方に関する議論を積極的に交わし、可感的世界の合理的な解釈を提示し、その高位原理との関係を明らかにしている。そこから浮かび上がってくるのは、プロティノスが可感的世界の探求に一定の重要性を見積もっており、それが魂の高位原理への還帰という彼にとっての最重要課題へと接続するものと考えていることである。本博士論文の目的は、以上の問題意識に則り、プロティノスの可感的事物に関わる探求プロセスを検討し、その議論を同時代的な文脈へと適切に位置づけることで、プロティノスによる可感的世界の探求とその意義を解明することである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一章：プロティノスによる『ティマイオス』篇解釈の一側面 —「二重の自己展開活動理論」による制作者(δημιουργός)解釈—

第一節：プロティノス以前の『ティマイオス』解釈とその問題点

第二節：プロティノス自身の制作者像とその問題意識

第三節：DAT の諸規則とプロティノスにとっての利点

第二章：プロティノスの擬似質料・形相論

第一節：ペリパトス派的実体論の受容と変容

第二節：プロティノスにとっての可感的実体、実体性と性質の関係

第三節：ロゴスの導入、可知的世界と可感的界との連続

第四節：認識主体と可感的実体の関係、認識の変容

第三章：非物体的なものから成る物体の世界 —プロティノスによる可感的事物の理解について、『エネアデス』第 26 論攷(III.6)を中心に—

第一節：論攷概要とその主眼

第二節：質料の非受動性を巡るプロティノスの問題意識はどこにあるのか？

第三節：物体の大きさに関する問い

第四章：プロティノスにおける物体の問題 —嵩(ὄγκος)と性質の関係に着目して—

第一節：嵩というあり方

第二節：物体性の問題

第三節：性質の量化

第五章：プロティノスにおける「何であるか(τί ἐστιν)」の探求

第一節：プロティノスのディアレクティケー

第二節：「何であるか」と「なぜ」の探求

第三節：「何であるか」の終極

第六章：プロティノスの「神に似ること」と「美になること」 —徳(ἀρετή)と浄化(κάθαρσις)の関係に着目して—

第一節：神に似るための手立て

第二節：魂の浄化、及び徳と美の相違

第三節：美を介した類似の特性

結論

各章の概要

第一章は、プロティノスによる『ティマイオス』解釈の中から、特に制作者(δημιουργός)による世界制作神話を巡る論点を取り上げる。『ティマイオス』は、プラトン派に属する限り、可感的世界の考察を行う上での権威的テキストとなる。しかしながら、そこに描かれているような擬人的原理に基づく可感的世界の成立過程の説明は、プラトン派を含め批判的吟味の対象となった。プロティノスもまた無批判に『ティマイオス』の記述を受け入れることはなく、先行解釈との対話の結果として独自の制作者像を構

築してゆくことになる。本章の目的は、プロティノスが彼自身に至るまでの制作者解釈を踏まえ提示した全く新しい制作者像と、その制作者を原因として可感的世界が生み出される仕方を説明する理論として導入された「二重の自己展開活動理論」を検討し、その新奇性と意義を確認することにある。第一節では、プロティノスに至るまでの『ティマイオス』解釈の方向性と、プラトン派内部における制作者像を巡った議論の文脈を確認する。第二節では、以上の議論の文脈に対してプロティノスが提示する問題意識を確認し、その解決策として提案される「思案を伴わない制作者」像のあり方を検討する。第三節では、プロティノスにより導入された新たな制作者が可感的世界を作り出すプロセスである、自然的産出モデルとしての「二重の自己展開活動理論」を取り上げ、その諸規則と利点を考察する。

第二章は、プロティノスが可感的事物を主題とし、当時恐らく優勢であったペリパトス派的実体論に対して行った批判を取り上げる。プロティノスがまず着手するのは、『カテゴリー論』と『形而上学』を根拠にペリパトス派が唱える実体(οὐσία)の規定に関して、その根本的不備を指摘することである。その上でプロティノスは、自身の構想する可感的事物の構造を説明するのである。この説明にはペリパトス派と共有する質料・形相という語彙が用いられるが、もはやそれぞれの内実はペリパトス派のものとは完全に異なっている。本章では、プロティノスの可感的事物及び可感的世界の構造はこのいわば「擬似質料・形相論」によって成り立っており、そこで「性質の束」として理解し直された形相理解と、ペリパトス派の形相理解との相違点が指摘される。また以上の分析を経てペリパトス派の枠組みを解体し、独自の仕方で理解された質料・形相間の関わり合いに基づいて可感的世界の構造を捉え直す中に、プロティノス特有の高位原理への還帰、上昇というモチーフへの接続があり得るということが主張される。第一節では、ペリパトス派の実体論がプラトン派に与えた影響を確認し、プロティノスに至るまで等閑に付されてきた「物体に備わる形相」のあり方を、改めて彼が問題として取り上げたことを指摘する。第二節では、「諸性質と質料からなる何らかの集塊」として理解されたプロティノスの可感的「実体」について、それを形相という観点から考察し、その原因である可知的実体との関係を明らかにする。第三節では、可感的世界における事物と、それらの原型と言える可知的実体との間に見出される共通性及び差異が取り上げられる。第四節では、以上の分析を経て捉え直された可感的事物について、それを認識する主体という観点から考察し、その可感的事物に関わる認識の変容可能性は、魂の向け変え、還帰というプロティノスにとっての最重要課題と地続きのものだということが主張される。

第三章では、前章で紹介された「擬似質料・形相論」の構成要素から質料(ὑλη)を取り上げ、プロティノスがそこに与えた独自の解釈を検討する。着目するのは、プロティノスが強調する質料の非受動性(ἀπάθεια)、つまり、一切の転化を被らないという質料の存在性格である。プロティノスの時代において、特定の事物が成立する以前の第一質料を導入することは、複数の学派に共通する傾向であった。特にプロティノスの構想する質料理解は同時代のペリパトス派の第一質料と多くの共通点を持ちながら、彼はそこに非受動性という更なる独自の特徴づけを認めることで、他学派からの差別化を図る。ただここでも、プロティノスの質料解釈は『ティマイオス』に忠実なものとは言えず、むしろペリパトス派の第一質料論に備わる不備を指摘した上で必然的に導き出される独自の理解として昇華された内実を持つものだということが判明する。第一節では、本章が中心的に取り上げる第 26 論攷「非物体的なものの非受動性について」において展開される質料論の焦点を確認し、そこでのプロティノスの問題意識を整理する。第二節では、非受動性という、第一質料に関するプロティノス独自の特徴づけについて、その導入経緯を同時代的な議論、特にアフロディシアスのアレクサンドロスの第一質料論と比較し、それが論敵の不備を回避、解消するものとして導かれた、プロティノスにとっての必然的結論であったということを指

摘する。第三節では、次章の主題へと接続する論点として、以上の質料の非受動性を導入するにあたって問題となる「大きさ」概念を取り上げ、プロティノスがそれを形相原理に基づいて成立するものと見なしていることを確認する。

第四章では、前章で導入された質料の非受動性というあり方を認めるときに直面するアポリアを扱う。すなわち、プロティノスの言う非受動なる質料とは、一切の転化を受け入れないものとして説明されるのだから、それ自体が物体(σῶμα)となることはない。このように前提するとき、我々が日常的に経験、感覚する物体としてのあり方の根源はどこに求められるのか、という問題である。ここでの課題は、質料を物体の構成要素に含ませることなく、形相のみを直接的原因とし、三次元的延長の成立へと寄与させる仕方である。プロティノスはこの困難を解消し、アイデアを物体に対し先行させるプラトン派が必然的に直面する、非物体的な原因が物体を産出するとはいかなる事態か、という難問を解決する。第一節では、プロティノスが考える物体・非物体の境界を検討し、その両者を分かち基準が三次元性の有無に求められていることを確認する。また、その三次元性の成立過程で言及される嵩(ὄγκος)というあり方を巡る現代の議論状況を紹介する。第二節では、物体性(σωματότης)をキーワードとして他学派の物体に関する見解を比較し、物体のあり方を物体の内部で説明し尽くすことは出来ないという、他学派に対するプロティノスの立場を明確にする。第三節では、実際にプロティノスが考える三次元性の成立過程と嵩というあり方が、性質の量化というアイディアに即して、所謂「空間」概念へと接続するものとして説明される。

第五章では、ここまで解明してきたプロティノスにおける可感的世界の構造を基にし、物体・非物体あるいは可感的・可知的という相容れない二領域を跨ぐ上昇のプロセスを中心主題とする。プロティノスにおいても、この上昇の起点となるのは可感的世界であり、その探求の中に手掛かりを見つけなくてはならない。この上昇を支える営みとして、プロティノスはディアレクティケーへの言及を行う。哲学の出発点である「何であるか(τί ἐστιν)」という問いを突き詰め、そう問うことの終極へと歩みを進めるとき、人は可感的世界の探求から可知的世界の探求へと足を踏み入れることになる。第一節では、先行するプラトン派とのディアレクティケー理解との差異を確認しつつ、プロティノスのディアレクティケー観をまとめ、そこに与えられた上昇の契機という位置付けと、ディアレクティケーの実践可能性という問題点を同時に指摘する。第二節では、ディアレクティケーの実践へと繋がる「何であるか」という哲学的問いの形式を問題とし、プロティノスがそこに担わせた役割を見てゆく。そこでは、プロティノスにとっての「何であるか」という問いは、その対象となる事物が「なぜ」そうあるのかという原因性を巡る問いをも含み込むものであり、必然的に可知的実体への参照を必要とするものだということが明らかとなる。第三節では、「何であるか」という問いを突き詰める先にプロティノスが想定する認識対象の喪失という事態が取り上げられる。あくまでプロティノスにとっては、可知的実体としてのアイデアすらも複合性を備えるものであり、その複合を解きほぐしてゆくことの中にディアレクティケーの実践があり、より単一の原理への接近があり得るのである。

第六章では、前章での言葉を介した上昇プロセスを別の角度から眺め、上昇を得るにあたって美の概念が果たす役割を検討する。プロティノスはこの上昇を「神に似ること(ὁμοίωσις θεῷ)」というプラトンのモチーフに重ねて説明することがあるが、この「似ること」の理解を発展させ、自己の変容というプロティノス独自の境地へと接続させる。その入り口は可感的美の構造を原因とともに正確に知ることであり、その意味でプロティノスによる可感的世界の考察は極めて重要な意義を持つ。加えてそこには、万人が参与し得る普遍的な営みとしての側面も同時に持たされることになる。第一節では、「神に似るこ

と」というアイディアについて、徳(*ἀρετή*)をキーワードとし、人間が神に似るという事態に関してプロティノスが抱いていた問題意識を整理する。ここでは、プロティノスにとっての「神に似ること」とは、人間が徳を備える中で魂を浄化させるプロセスなのだということが明らかとなる。第二節では、この浄化プロセスに関して、美という概念が果たす役割を検討する。徳を備えることは魂の浄化のために必要だが、神の段階に至って徳はもはや必要とされない。このジレンマを解消するものとして、美を介した類似、延いては美そのものになるというプロティノス独自の見解が提示されることになる。第三節では、美の認識という場面を取り上げ、可感的美の認識と、その美の原因を巡る問いこそが、「神に似ること」つまり魂の還帰を支える重要な要素であったことを指摘する。

このように、観点を変えながらプロティノスによる可感的世界の探求の内実を確認する中で明らかとなったことの一つは、プロティノスにおける可感的世界の構造が、どこまでもプラトン『ティマイオス』の記述を下敷きとして構想されていることである。しかしながらこのことは、プロティノスがプラトンの記述をそのまま受け容れ、字義通りの解釈を擁護したということの意味しない。プロティノスの時代に至るまでに、『ティマイオス』の記述はプラトン派か他学派かを問わず、多数の有意な批判的吟味に晒されてきた。プロティノスにおいて一見突飛な印象を与える制作者としての知性、非受動的な質料といった諸概念も、もちろん哲学史における新奇性を有しながら、他方で彼以前の哲学史と地続きのものだと見なすことが出来る。

また、プロティノスを「新プラトン主義者」としてラベリングする際に必ず持ち出される一者、知性といった高位原理の導入は、現代の読み手のみならず、弟子のポルフュリオスを含む彼の同時代人にあっても即座には理解不能なものだったと伝えられる。決してプロティノスによる荒唐無稽な発想ではなく、またプラトン主義的立場を強行するための独断論の産物でもない。むしろ、同時代に至るまでの哲学的蓄積を十全に検討した上で、プラトン主義内外を問わず、学説としての妥当性を突き詰めた結果必然的に要請されたものとして構想されている。ここに哲学者プロティノスの対話的態度を見てとることが出来よう。

非物体的な原理を巡る論争は、学派ごとに措定する前提の齟齬を原因として、しばしば健全な議論の成立が危ぶまれるものである。プロティノスはその点を念頭に置き、読み手、あるいは論敵の多様性を十分に考慮した上で、自由に論の焦点を変更する書き手だったように思われる。当然プラトン派内部のプラトン解釈においてイデア的原理の存在を説得する必要はなく、むしろ前提として扱われてよいはずである。しかしながらプロティノスは、他学派からの批判に対する際にもイデア的原理という前提を強弁するわけではない。

このときのプロティノスの態度は、いわば柔軟かつ誠実である。つまり、他学派とその実在性を共有している可感的世界のあり方を題材とし、他学派の学説に備わる根本的不備を指摘した上で初めて、その不足を補完する説明項としての高位原理の存在に訴えかけるのである。非物体的原理とは異なり、可感的世界を対象とした探求は必然的に現象、経験との整合性を問われることになる。そして、現象、経験に最もよく合致すると「思われた」説明が、理論としての精巧さを獲得することになる。またこの精巧さが確保され、我々が共通して被る現象、経験の大部分を整合的に説明し得るとき、その理論は真実らしさを獲得するだろう。プロティノスの時代に至るまでに、ペリパトス派の可感的実体論がこの精巧な理論としての地位を獲得していのだと想像される。実際、プロティノスの説明にも多分に流入しているペリパトス派の哲学語彙は、この当時の思想状況を物語っているようにも思われる。

プロティノスに言わせれば、この理論としての精巧さは可感的事象をうまく説明する一方で、観察者

を容易に納得させ、更なる根本原因への歩みを阻害してしまう要因でもあった。だからこそプロティノスは、このペリパトス派による精巧な可感的事物の分析にメスを入れ、その根本的な不備を指摘し、自身の構想する「新たな」可感的事物の理論を構築したのだと考えられる。

この可感的事物の説明は、物体に関わる現象を説明し得るものでありながら、いわゆる「自然学」という範疇に収めきけることは出来ない。その中では常に、可感的事物から切り離されたかたちで自立する非物体的な原因の存在が想定されている。すなわち、プロティノスにとって、可感的事物を対象とした考察の中には必然的に非物体的な原理への参照が含まれている。それ故、その構造を具に見て検討することは、それを作りだした高位原理の存在に気付き、また上昇するための契機を掴むことに他ならない。このように、プロティノスは可感的事物を切り捨てず、むしろそこに整合的な説明を与える中で、自身の哲学を一部の人間に向けた内向きの教説とすることなく、万人に開かれた営みとして構想していたものと思われるのである。

審査要旨

審査委員会は、2024年2月7日午後1時より午後4時半まで、慶應義塾大学三田キャンパスにて、豊田君と審査委員4名、および塾内外の研究者や大学院生が参加して対面で行われた。

本論文は全6章から構成されるが、その中の4つの章がすでに全国レベルの査読付き学会誌に掲載済み、または掲載決定済の論文であることが示すように、全体的な論述レベルの高さが審査委員から評価された。

本論文は、西洋古代哲学においてプラトン、アリストテレスと並んで重要な位置を占めるプロティノスの哲学について、前世紀の研究においては軽視されがちであった、可感的世界とその中の事物に関するプロティノスの思想を理解し、その意義を明らかにしようとする意欲的な試みである。プロティノスは「新プラトン主義」の創始者として位置づけられるだけでなく、彼自身もプラトン哲学を継承・発展させる者と自覚していたが、二人の哲学者の時代的な隔たりは、その間に様々な哲学史上の展開を巻き込んでいるため、プロティノスの論述の中にも、プラトン著作から直接得られるものにとどまらない、新しい概念や問題意識が現われてくる。本論文は、そういった要素のうち、とくに中期プラトン派とペリパトス派の影響や、それらに対する応答に着目することによって、プロティノスの思想を明らかにしようとする点に大きな特徴がある。

本論文は、プロティノス『エネアデス』の探究過程を、先行するプラトン思想、とりわけ『ティマイオス』の思想の再構築的解釈の過程として、そして、ギリシア哲学史との連続性の視点から先行思想への批判的解釈過程として描くことによって、プロティノスについて、神秘主義者像以前に、真摯な対話的で批判的な哲学者像を構築することに成功している。

本論文は、まずプラトン『ティマイオス』の世界制作神話を取り上げ、それが内包する難点を克服するために、プロティノスが「二重の自己展開活動理論」という説明法を提出した、という解釈を展開することから始まり、彼の質料観・形相観の特殊性とその意義について様々な観点から論じたあと、この可感的世界からの上昇について、彼のディアレクティケー論を通じて、さらには美についての議論を通じて、跡づけようとするものである。そこから浮かび上がってくるプロティノスの可感的世界に対する見方は、純粋な自然学的動機に基づくものではなく、この世界の成り立ちを正確に見定める中に、上位の原理への上昇の足がかりを求めるものであることになる。

一般に、形而上学の議論は「上からの」演繹的な知性主義的傾向をもつが、しかし「可知的世界」のみならず、積極的に「可感的世界」をも論じるプロティノスの形而上学に対して、本論文は、むしろ「下から」論じようとする意欲的な方法的開拓精神をもっている。

本論文は、「可感的世界」の探究過程自体がプロティノスの形而上学の体系性という点で重要かつ必要不可欠であることを示しているが、特に「形相」「質料」「物体」等の概念について、プロティノス独自の説明方式が貫かれていたことを明らかにしている。このようなプロティノスの可感的実体論という、見過ごされがちな問題に光を当て、一定の研究成果を挙げた点は、大きな評価に値する。とりわけ、プロティノスの質料観・形相観の特殊性について粘り強くなされた考察は、豊田君の今後の研究の進展を予期させるものである。

さらに、哲学史の研究に必須のことであるが、本論文の議論を支えるために、プロティノスの原文だけでなく、様々な関連資料が渉猟されていることは、本論文の学術性を支えるものである。

最後に、本論文は、プロティノスの可感的事物についての説明を、他学派のような自然学的探求とは違って、上位の原理との関係の中で成立している事情を明らかにすることによって、それらの原理への上昇の契機をつかむこととして意義づけている。これは、奇をてらうことのない、オーソドクスな結論であるが、このことが、プロティノスの可感的世界論を細かく分析したうえで述べられるところに、この結論の重みがあると評価することができる。

本論文の問題点としては、扱った問題の特殊性という側面もあるが、プロティノスの原文の分析を徹底すべきと思われる箇所においても、二次資料の分析に重点が置かれがちな場合が散見された。

本論文の目的が、プロティノス形而上学を思想史の中に位置づけようとするものであるため、テキストの論争的部分（主張内容の相違部分）に集中することで、その思想の立場を客観化、相対化することが必要である。しかしその狙いの故に、プロティノスのテキストの内在的解釈が弱まり、プロティノスのテキスト同士の関係性や、比喩的表現への着目が低減してしまう結果となっている。「可感的世界」の概念自体について言えば、内在的解釈だけでも、執筆時期に応じた整合的解釈や概念規定の展開を描き出すこともできたであろうし、「質料」や「物体」といった存在論的視点だけでなく、「見る」といった認識論的視点も解釈に組み込めば、プロティノス形而上学の中でより体系的な考察ができたのではないと思われる。

また、プロティノスに比較的近い時代の資料に脚光を当てるあまり、プロティノス哲学の原点とも言うべきプラトン哲学との関係づけが希薄になったことも否めない。今後のさらなる研究によって、それらの問題点が克服され、そのプロティノス解釈がより内容豊富で意義深いものとなることに期待したい。

さらに、本論文は、プロティノス形而上学を突出した独創的な思想とみなすのではなく、哲学史上において相対化することを狙っている。このような研究は、哲学史全体を俯瞰し、歴史的に包括的な立場から、プロティノス形而上学を位置づけることになるはずである。例えば「可感的世界」を論ずるに当たっても、「個物」や「個体化の原理」、「自然学」といった哲学史的視点に対して、プロティノス形而上学がどのように応えるのかについては、思想史的視点から明確にすべきものとなろう。審査委員会における質疑応答によって幾らか回答はあったが、研究の目的からすれば、哲学史的視点に由来する諸問題に、プロティノス形而上学がどのように応答するのかについて、総括的な章を設けて論じてもよかったのではないと思われる。

このように、審査委員会では複数の批判的なコメントも出されたが、しかしこれらの批判は、本論文が博士学位請求論文の基準を満たしていないことを示すものではない。かえって、本論文は、そのよう

な基準を十分に満たしているからこそ、学術的に真摯な批判や反論の対象となっている。明確な問題意識と意欲的で斬新な方法論に貫かれた本論文は、日本におけるこれまでのプロティノス研究の中でも、傑出した学術的意義を有することは疑いない。

以上により、審査委員一同は、豊田泰淳君の本論文が、博士（哲学）の学位を授与するのに十分ふさわしいものであると判断するものである。

以上

2024年2月12日

審査委員会一同

なお、豊田泰淳君の学識確認を以下の通り行った。

学識確認 慶應義塾大学文学部教授
文学研究科委員

上枝 美典